

図25 竪穴住居3出土遺物

遺物番号	挿図番号	遺層	構位	種別	器種	口径(cm) (底)	器高 (cm)	特徴	胎土 焼成	色調	備考
27	25	竪穴住居3	床直	弥生	甕	*18.6	△16.8	外面：口縁部平行沈線文後ナデ、頸部ナデ 肩部ハケ・ナデ・刺突文 内面：口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	砂粒多量、礫少量 良	外面：浅黄橙色、 一部橙色 内面：にぶい黄橙色	胎土分析試料10
28	25	竪穴住居3	床直	弥生	器台	*12.5	△17.2	外面：脚柱部ナデ、脚裾部平行沈線文後ナデ 内面：器受部・脚柱部ナデ、脚裾部ケズリ	砂粒多量、礫少量 良	にぶい橙色、 部分的に赤褐色 (赤色塗彩)	胎土分析試料8

遺物番号	挿図番号	地層	区	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
S44	24・25	竪穴住居3	床直	砥石	粘板岩	6.7	2.95	2.25	64.0	
S45	24	竪穴住居3	床直	台石	角閃石安山岩	30.0	24.8	10.9	12500.0	図版14-4

竪穴住居4の土層堆積（図26）

番号	層名	色調	備考	番号	層名	色調	備考
①	黒褐色土	(Hue10YR 3/2)	炭混	⑮	にぶい黄橙色土	(Hue10YR 7/3)	
②	暗灰黄色土	(Hue2.5YR 4/2)		⑯	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 4/3)	炭、VI・VII層ブロック少量混
③	暗灰黄色土	(Hue2.5YR 5/2)		⑰	明黄褐色土	(Hue10YR 6/6)	炭、VI・VII層ブロック少量混
④	にぶい黄橙色土	(Hue10YR 6/4)	炭少量混	⑱	黄褐色土	(Hue10YR 5/8)	炭、VI層ブロック少量混
⑤	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5/3)	炭少量混	⑲	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5/3)	
⑥	明褐色土	(Hue7.5YR 5/6)	炭、VI層ブロック少量混	⑳	黒褐色土	(Hue10YR 3/3)	炭少量混
⑦	明赤褐色土	(Hue2.5YR 5/6)	焼土、炭混	㉑	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5/4)	VII層・黄褐色土ブロック少量混
⑧	にぶい黄橙色土	(Hue10YR 5/4)	炭、VI層ブロック、焼土少量混 貼床	㉒	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5/4)	
⑨	明黄褐色土	(Hue10YR 6/6)	炭少量、VI層ブロック多量混	㉓	黄褐色土	(Hue10YR 5/6)	
⑩	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 6/3)		㉔	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5/3)	炭、VI層ブロック少量混
⑪	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5/3)	炭、焼土少量混	㉕	褐色土	(Hue10YR 4/4)	VII層ブロック少量混
⑫	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5/4)		㉖	黄橙色	(Hue10YR 7/8)	
⑬	褐灰色土	(Hue10YR 4/1)	VI・VII層ブロック少量混				
⑭	にぶい黄褐色土	(Hue10YR 5/4)	炭少量混				

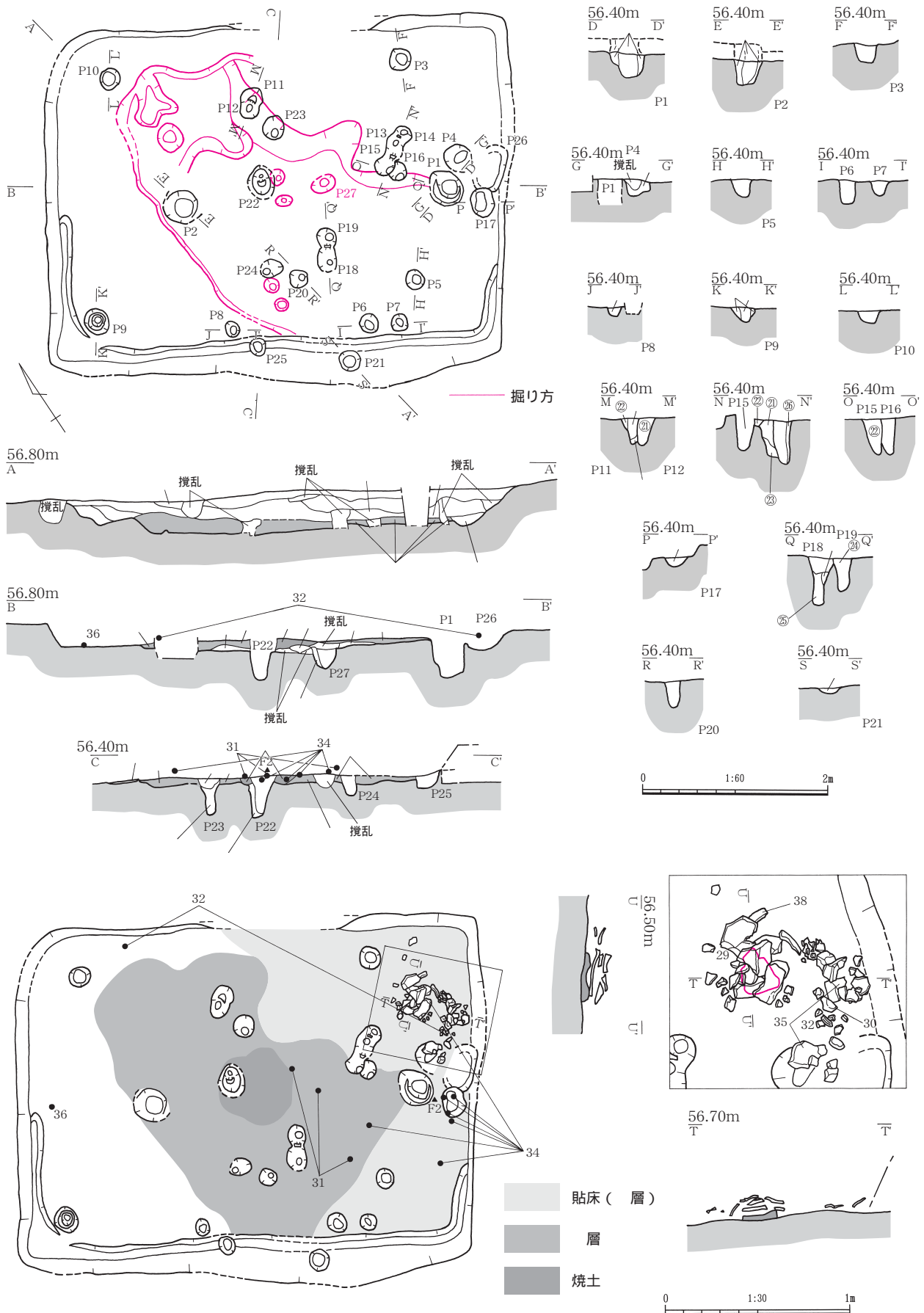


図26 竪穴住居4

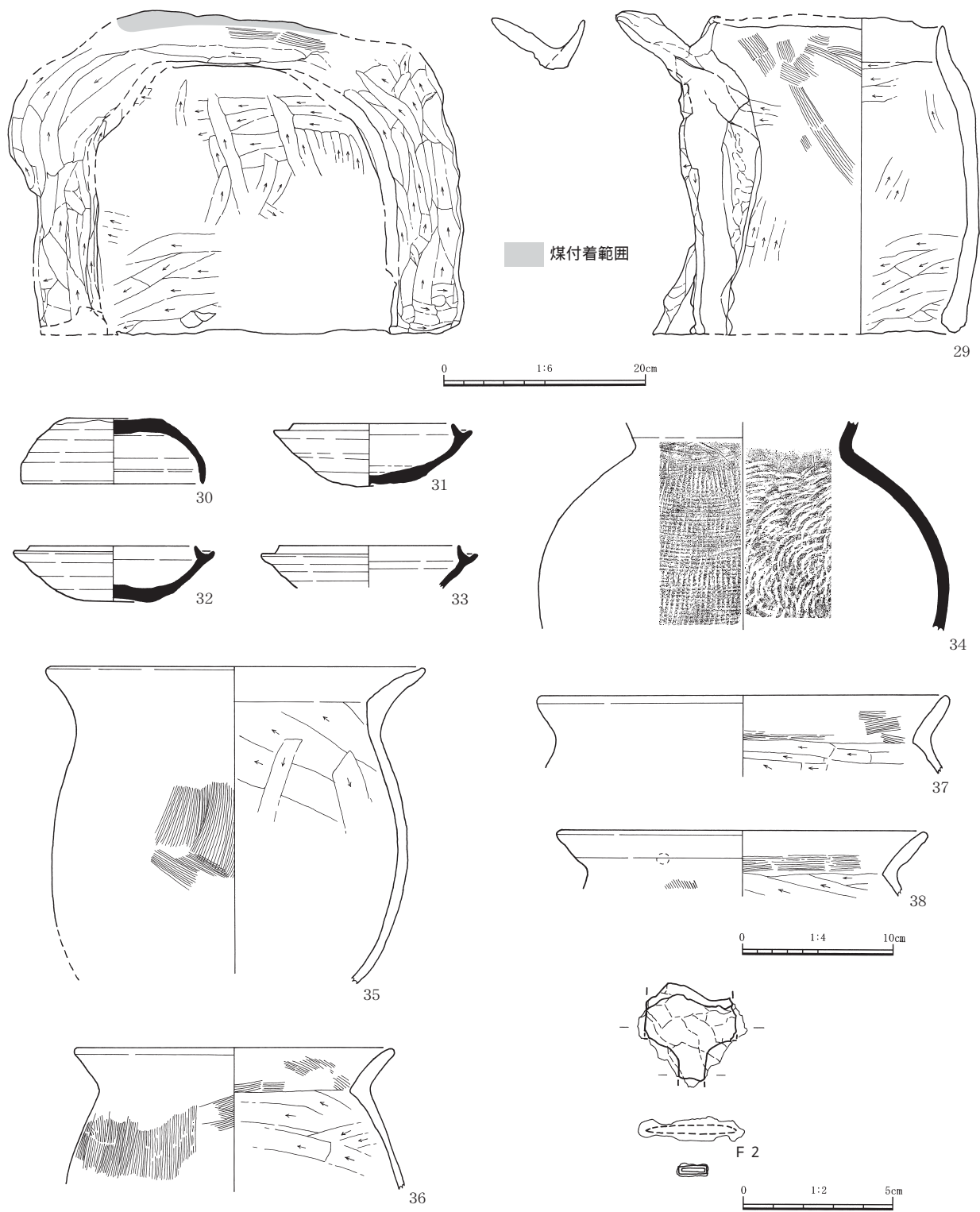


図27 竪穴住居4出土遺物

床面直上より出土した土器が示す時期から、本遺構は弥生時代終末期に属すると考える。隣接する竪穴住居2との時期差はほとんど認められないが、先後関係についてははっきりしない。

(加藤)

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別	器種	口径(cm) (底)	器高 (cm)	特徴	胎土 焼成	色調	備考
29	27	竪穴住居4 床直	土製品	移動式竈	* 24.0	33.25	体部外面：ハケ、ナデ、ケズリ 内面：ケズリ、ナデ 底部内面：ハケ後ナデ・ケズリ、煤付着箇所有り 底部外面：ハケ、ナデ、ケズリ	砂粒多量 良	橙色	焚口縁に底貼付 胎土分析試料11
30	27	竪穴住居4 床直	須恵	坏蓋	* 12.8 (*6.5)	4.4	外面：口縁部～体部回転ナデ 天井部回転へラ切り後粗いナデ 内面：口縁部～体部回転ナデ 天井部回転ナデ後不整方向ナデ	砂粒少量 良	灰黄褐色	胎土分析試料19 ロクロ回転方向右
31	27	竪穴住居4 床直	須恵	坏身	* 11.0 (4.9)	4.1	外面：口縁部～体部回転ナデ 底部回転へラ切り後粗いナデ 内面：口縁部～体部回転ナデ 底部回転ナデ後不整方向ナデ	砂粒少量 良	灰色	胎土分析試料18 ロクロ回転方向左
32	27	竪穴住居4 床直	須恵	坏身	* 11.2 (*4.7)	3.7	外面：口縁部～体部回転ナデ 底部回転へラ切り後粗いナデ 内面：口縁部～体部回転ナデ 底部回転ナデ後不整方向ナデ	砂粒少量 良	灰黄褐色	胎土分析試料16 ロクロ回転方向左
33	27	竪穴住居4 床直	須恵	坏身	* 12.2	△3.0	外面：口縁部～体部回転ナデ 内面：口縁部～体部回転ナデ	砂粒少量 良	灰黄褐色	胎土分析試料17
34	27	竪穴住居4 床直	須恵	甕	—	△13.8	外面：頸部回転ナデ、体部ナデ・タタキ 内面：頸部回転ナデ、体部ナデ・当て具痕	砂粒少量 良	外面：灰色 内面：明オリブ灰	胎土分析試料20
35	27	竪穴住居4 床直	土師	甕	* 25.6	△22.0	外面：口縁部ナデ、胸部ハケ・ナデ 内面：口縁部ナデ、胸部ケズリ	砂粒・礫多量 良	外面：浅黄褐色 内面：にぶい橙色	胎土分析試料14
36	27	竪穴住居4 床直	土師	甕	* 21.0	△9.4	外面：口縁部風化著しく不明、胸部ハケ・ナデ 内面：口縁部ハケ・ナデ、胸部ケズリ	砂粒多量、礫少量 良	にぶい黄褐色	胎土分析試料13
37	27	竪穴住居4 床直	土師	甕	* 27.2	△5.2	外面：口縁部～肩部上半風化のため不明 内面：口縁部ハケ・ナデ、胸部上半ケズリ	砂粒多量、礫少量 良	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色 にぶい橙色	胎土分析試料12
38	27	竪穴住居4 床直	土師	甕	* 24.2	△4.2	外面：口縁部ナデ・ユビオサエ、肩部ハケ・ナデ 内面：口縁部ハケ・ナデ、胸部ケズリ	砂粒多量、礫少量 良	にぶい黄褐色、 橙色	胎土分析試料15

遺物番号	挿図番号	遺構層位	遺物名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	磁精度	メタル度	特徴
F 2	27	竪穴住居4 ⑨層	鉄製品(鍛造品) 鏃、有茎三角式?	3.5	3.7	1.05	7.8	2	錆化(△)	下手側に平作りの茎部がわずかに残る有茎三角式鉄鏃。 鏃身部は大半が破面で元の形状を読み取りにくい。右側の側部 はわずかに生きている可能性あり。両側の返りは欠落する。

## 4. 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代に属する遺構は竪穴住居1棟に留まる(図17)。土師器・須恵器片を表土・攪乱土中で確認したが、I層中に包含しているかどうかは判然としない。先述したように、調査地中央部東側～南側にかけて検出したピット群のいずれかは当該期に属する可能性がある。

(加藤)

### 竪穴住居4 (図26・27 カラー図版3・4 図版11・12)

I・J9グリッドに位置し、表土下V層上面で検出した。平面形が長形状を呈する竪穴住居である。床面の長軸4.7m、短軸3.5m、床面積は約16.6㎡、検出面からの深さは最大で33cmを測る。住居北東部は後世に掘削された溝により削平を受け(図7)、残存状況は不良である。

床面には住居北東～東側にかけて貼床(⑧層)が施され、表面が固く締まる。中央部は一段深く掘り込まれ、基盤土に類似し若干の炭が混じる⑨層が充填され、西～南西側は基盤層(VI層)をそのまま床面としている。周壁溝は住居南側を中心に認められた。住居北半は残存状態が悪いため全周していたかどうかは不明である。ピットは多数検出され、27基を数える。埋土は概ね褐・黄褐色系土で基盤土ブロックや炭を少量包含する。他に黒褐色系土を埋土とするものを多数検出したが、断面観察から大方が根攪乱と判断し除外している。ピット1・2は共に径約35cm、床面からの深さは40cm強を測り、位置と規模から支柱穴と考えられる。いずれも柱痕が遺存している(⑩・⑱層)。また、ピット3・5・9・10は深さ15～21cmと浅いが住居四隅に位置することから、上屋構造を支える補助柱の可能性を考えている。貼床除去後の底面には若干の凹凸がみられ、掘り方と判断した。貼床下ではピット27を検出している。

出土遺物は埋土上・中層から土器片が少量出土しているが、床面直上出土遺物について図示した(図26・27)。29は移動式竈である。焚口の周縁に底を貼り付けるタイプで、底部裏側に煤の付着が確認できる。住居内北東端においてつぶれた状況で出土した。直下には硬化した焼土が遺存しており、

その厚さは約9 cmである。焼土の平面的な広がりや竈の基部径とほぼ一致することから、竈の使用痕跡と思われ、竈は原位置を留めていると考える（図26中拡大図）。また、焼土位置とその周辺にかけてわずかな窪みが認められる。竈をしっかりと据えるためと推測するが、竈周辺は根攪乱の影響が認められ、明確ではないため可能性に留める。一方、住居のほぼ中央で平面形が不整な円形を呈する焼土の広がりを確認した。断面形は浅く椀状に窪み、炭混じりの焼土（⑦層）が堆積する。地床炉と思われるが、ピット22に切られている。ピット22の埋土は他のピットと同様に黄褐色系を呈するため、床面から掘り込んだものと判断した。住居を建てた後、ある段階で炉の使用を止めた可能性が考えられる。竈との併用の有無等、両者の使用について関係性が窺われるが、判然としない。竈の近辺には土師器甕（35・37・38）、須恵器甕（34）・坏蓋（30）・坏身（32）が出土しており、竈付近に置かれていたものと考えられる。また、鉄製品が一点出土し（F 2）、残存状態が不良だが有茎三角式鉄鍬の可能性はある。

床面直上出土の須恵器坏蓋・坏身（30～33）は出雲編年5期、陶邑編年TK217型式に併行すると考えられ、これらの年代観から本遺構は古墳時代終末期に属すると考える。

（加藤）

※製鉄関連遺物観察表中の「磁着度」とは鉄滓分類用の標準磁石を用いて資料との反応を1～8までの数字で表現したもので、数値が大きいほど磁着度が強い。「メタル度」とは小型金属探知機により判定された金属鉄の残留度を示し、H・M・L・特Lの4段階で表される。後者ほど残留度が高い。本遺跡堅穴住居2・4出土鉄製品はいずれも「錆化」で、金属鉄が残留していないことを示す。

## 5. その他の遺構と遺物

調査地では前述の遺構に加えて、掘立柱建物7棟、堅穴1基、土坑15基、溝3条、多数のピットを確認した（図7・28）。多くの遺構は地山面のV層上面で検出し遺物もほとんど出土せず、時期が不明なものである。調査地中央部～南側、堅穴住居の分布域に掘立柱建物も概ね位置するが、堅穴住居

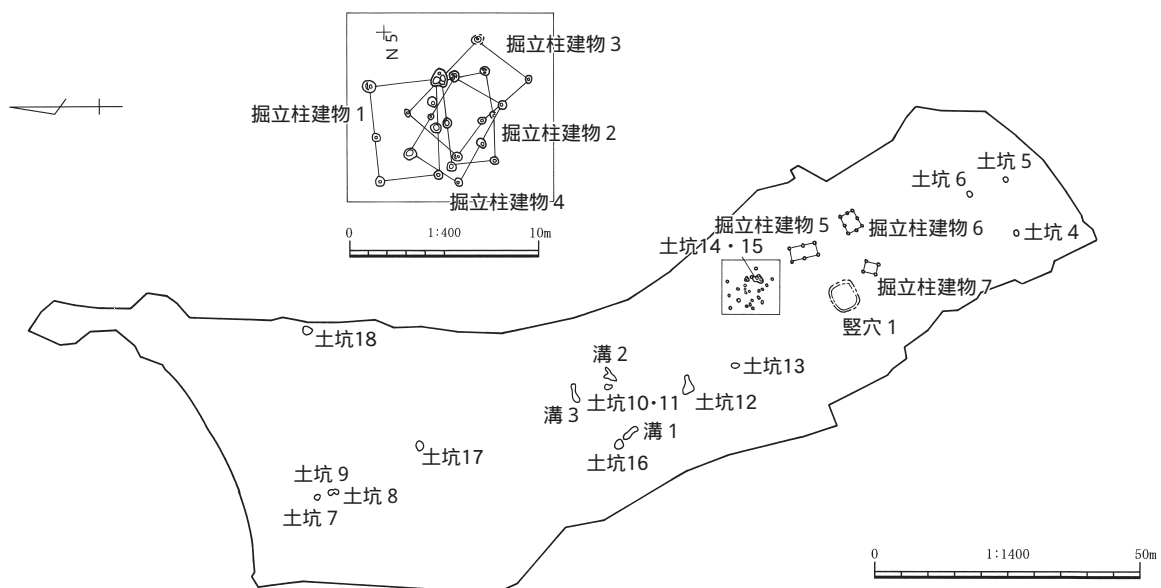


図28 その他の遺構配置



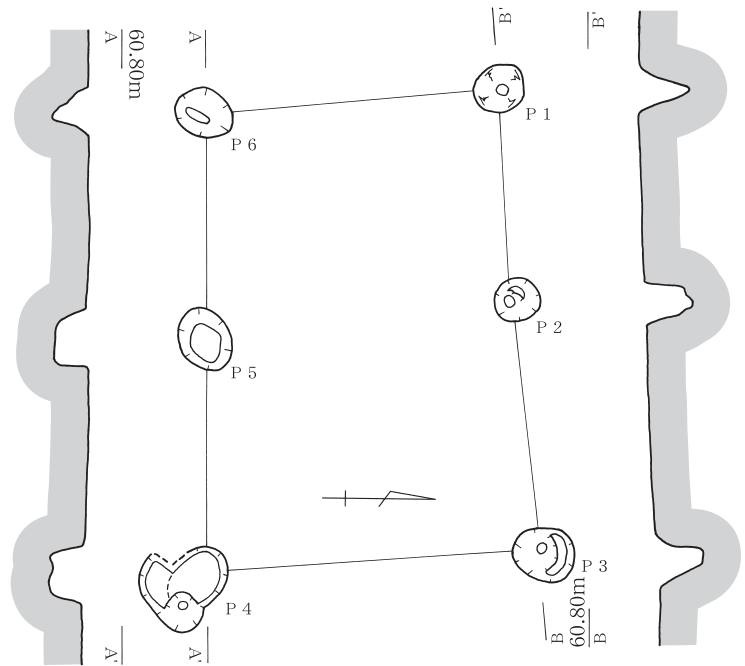
とのセット関係は不明である。製炭土坑と考えられる遺構は調査地北半に分布する。ピットは664基を確認し、調査地中央部～南側に多く分布する。柱痕が遺存しないものが大半である。ピット個々の詳細については、本節末尾に計測表を掲げているので参照されたい。

(加藤・日置)

### 掘立柱建物 1 (図29 図版5-1)

台地上中軸よりやや東側のM・N5グリッド、I層下のⅢ層上面で検出した。梁行1間、桁行2間の掘立柱建物である。柱間距離は梁行約3.5m、桁行平均2.4m、床面積は16.3㎡である。方位は約3度北に傾いた東西棟である。棟は等高線に対して平行する。なおピット4は掘立柱建物2ピット3と掘立柱建物3ピット2と重複する。図示できなかったが埋土の観察から、掘立柱建物1－掘立柱建物2－掘立柱建物3の順に建てられたと考える。掘立柱建物4とも重複するが、その新旧関係は不明である。柱穴の埋土は黒褐色系であった。柱穴からは遺物は出土しなかった。建物の時期は不明である。

(日置)



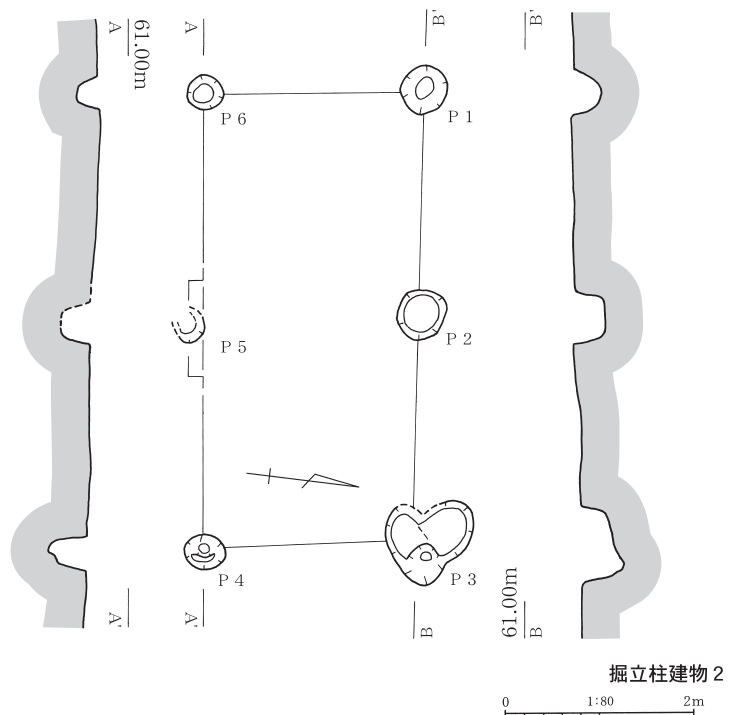
掘立柱建物 1

### 掘立柱建物 2

(図29 図版5-2)

N5グリッドにおいて、I層下のⅢ層上面で検出した。梁行1間、桁行2間の掘立柱建物である。柱間距離は梁行約2.1m、桁行平均2.4mである。床面積は11.04㎡である。方位は7度北に傾いた東西棟である。棟は等高線に対して平行する。前述したようにピット3は、掘立柱建物1ピット4と掘立柱建物3ピット2と重複する。これらの新旧関係は前述の通りである。掘立柱建物4とも重複するが、その新旧関係は不明である。柱穴の埋土は黒褐色系であった。遺物は出土しなかった。建物の時期は不明である。

(日置)

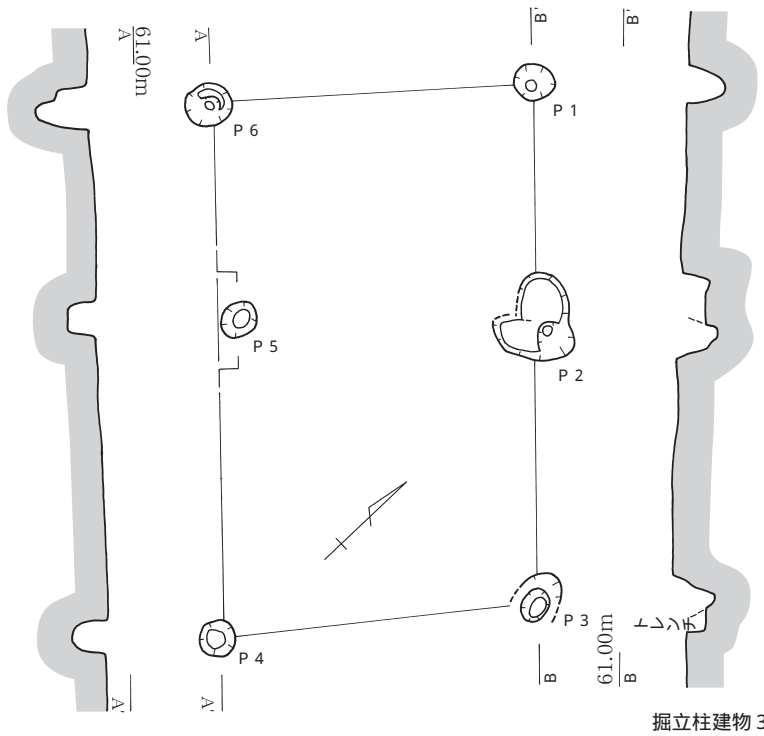


掘立柱建物 2

図29 掘立柱建物 1・2

掘立柱建物 3 (図30 図版5-2)

N5グリッド、I層下のⅢ層上面で検出した。梁行1間、桁行2間の掘立柱建物である。柱間距離は梁行約3.4m、桁行は平均2.8mである。床面積は19.3㎡である。方位は42度西に傾いた南北棟である。前述のように、ピット2は掘立柱建物1ピット4と、掘立柱建物2ピット3と重複する。新旧関係は前述の通りである。掘立柱建物4とも重複するが新旧関係は不明である。柱穴の埋土は黒褐色系であった。遺物は出土しなかった。建物の時期は不明である。



(日置)

掘立柱建物 4

(図30 図版5-2)

N5グリッドにおいて、I層下のⅢ層上面で検出した。梁行1間、桁行2間の掘立柱建物である。柱間距離は梁行約3m、桁行平均2.4m、床面積15.8㎡である。方位は32度北に傾いた東西棟である。掘立柱建物1～3と重複するが、これらとの新旧関係は不明である。遺物は出土しなかった。建物の時期は不明である。

(日置)

掘立柱建物 5

(図31 図版5-3)

台地の中軸よりやや東側、平坦に近い部分に位置する。O4グリッドにおいて、1層下のV層上面で検出した。梁行1間、桁行2間の掘立柱建物である。柱間距離は梁行約2.4m、桁行平均2.5mである。床面積は11.8㎡である。方位は12度西に傾いた南北棟である。棟は等高線に平行する。柱穴の埋土は黒褐色系を呈する。柱穴から遺物は出土しなかった。建物の時期は不明である。

(日置)

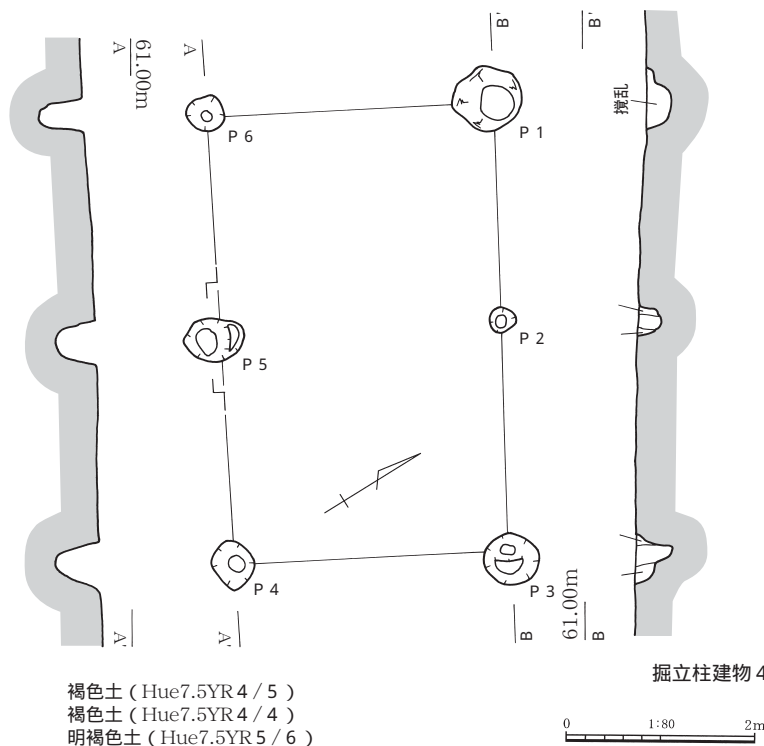


図30 掘立柱建物 3・4

掘立柱建物 6

(図31 図版6-1)

台地の東側に位置する。現況地形

における縁辺に近く、竪穴住居2に隣接する。P4グリッドにおいて、I層下のV層上面で検出した。梁行2間、桁行2間の掘立柱建物である。柱間距離は、梁行平均1.4m、桁行平均1.5mである。床面積は7.5㎡である。方位は30度北に傾いた東西棟である。ほかの建物に比べ、斜面に立地し、棟は等高線に対し直交する。柱穴の埋土は褐色を呈する。ピット5とピット7から弥生土器の細片が出土したが、図化できなかった。弥生時代終末期に属する建物の可能性がある。

(日置)

### 掘立柱建物7

(図32 図版6-2)

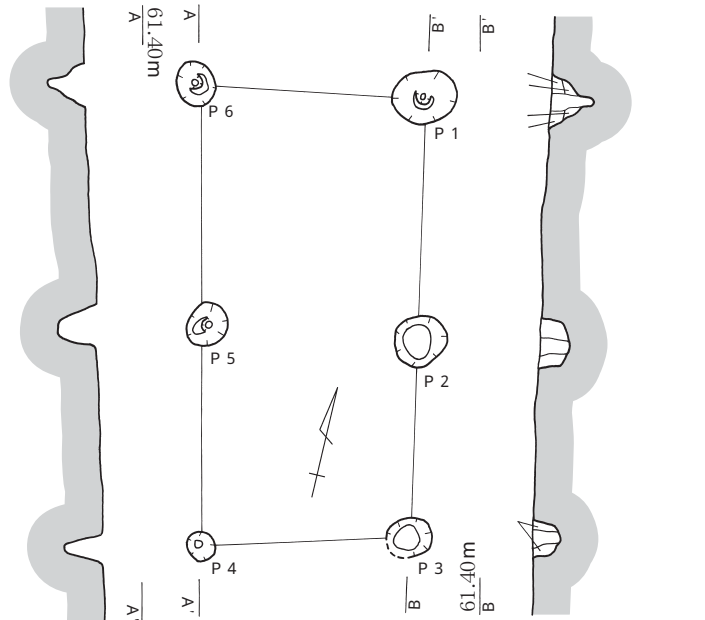
台地のほぼ中軸上に立地する。P5グリッドI層下のV層上面で検出した。梁行1間、桁行1間の掘立柱建物である。柱間距離は梁行2.0m、桁行2.6mである。床面積は5.2㎡である。方位は20度東に傾いた南北棟である。柱穴から遺物は出土せず、時期は不明である。

(日置)

### 竪穴1

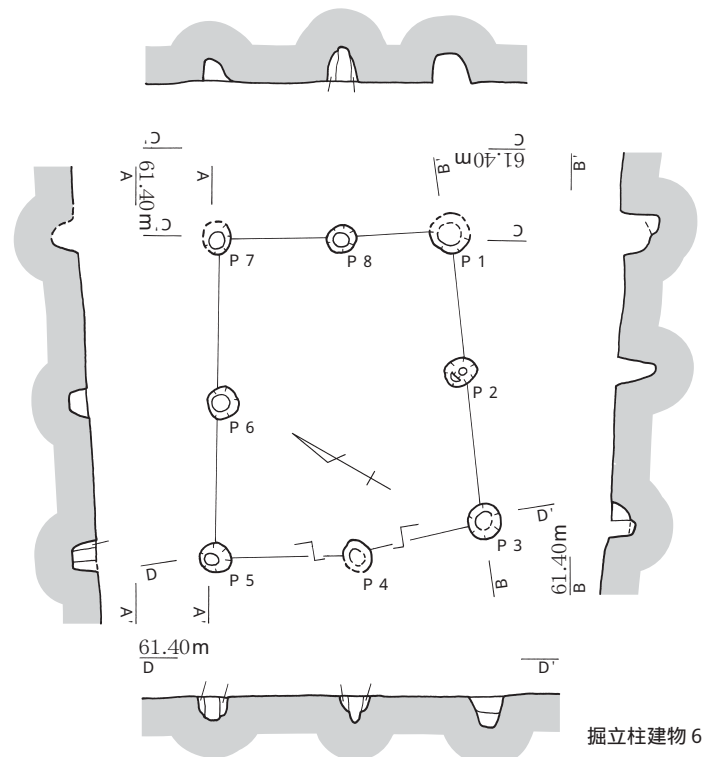
(図33 図版6-3)

台地のほぼ中軸上に位置する。O・P5グリッドにおいて、I層下V層上面で検出した。上屋構造を復原できず、竪穴と呼称する。平面は不整な方形で、規模は長軸5.6m、短軸4.9mである。検出面からの深さは約24cm、床面の標高は約61.10mである。床面はVI層上面にあたり凹凸がみられる。周壁下に断続的な1条の周壁溝を検出した。この周壁溝を切るピット1を検出したが、柱痕は遺存せず、小型で位置的にも主柱穴ではない。床面にはこのほかに遺構を見出せなかった。また、掘り方の周囲でも竪穴1に伴うと推察できる柱穴や土坑は見出せず、焼土面や炭化物などの痕跡も認められなかった。



黒褐色土 (Hue7.5YR3/2)  
 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)  
 褐色土 (Hue7.5YR4/4)  
 褐色土 (Hue7.5YR4/4) 黒褐色土ブロック混

掘立柱建物5



黒褐色土 (Hue7.5YR3/2) 炭化物少量、褐色土ブロック混  
 黄褐色土 (Hue10YR5/8) 褐色土ブロック多量混  
 黒褐色土 (Hue7.5YR3/2)  
 褐色土 (Hue7.5YR4/4) 黒褐色土ブロック多量混  
 褐色土 (Hue7.5YR4/6)

掘立柱建物6

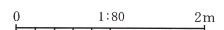


図31 掘立柱建物5・6



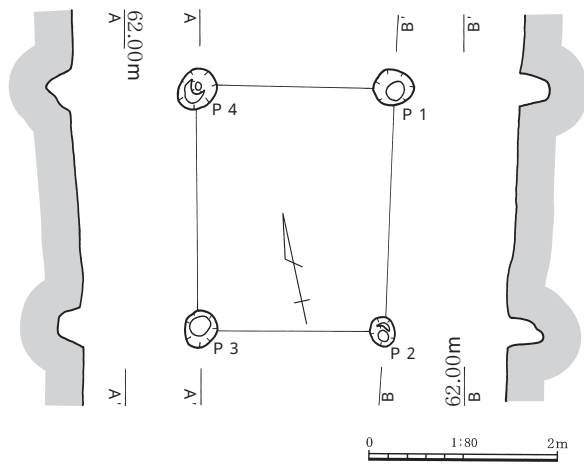


図32 掘立柱建物7

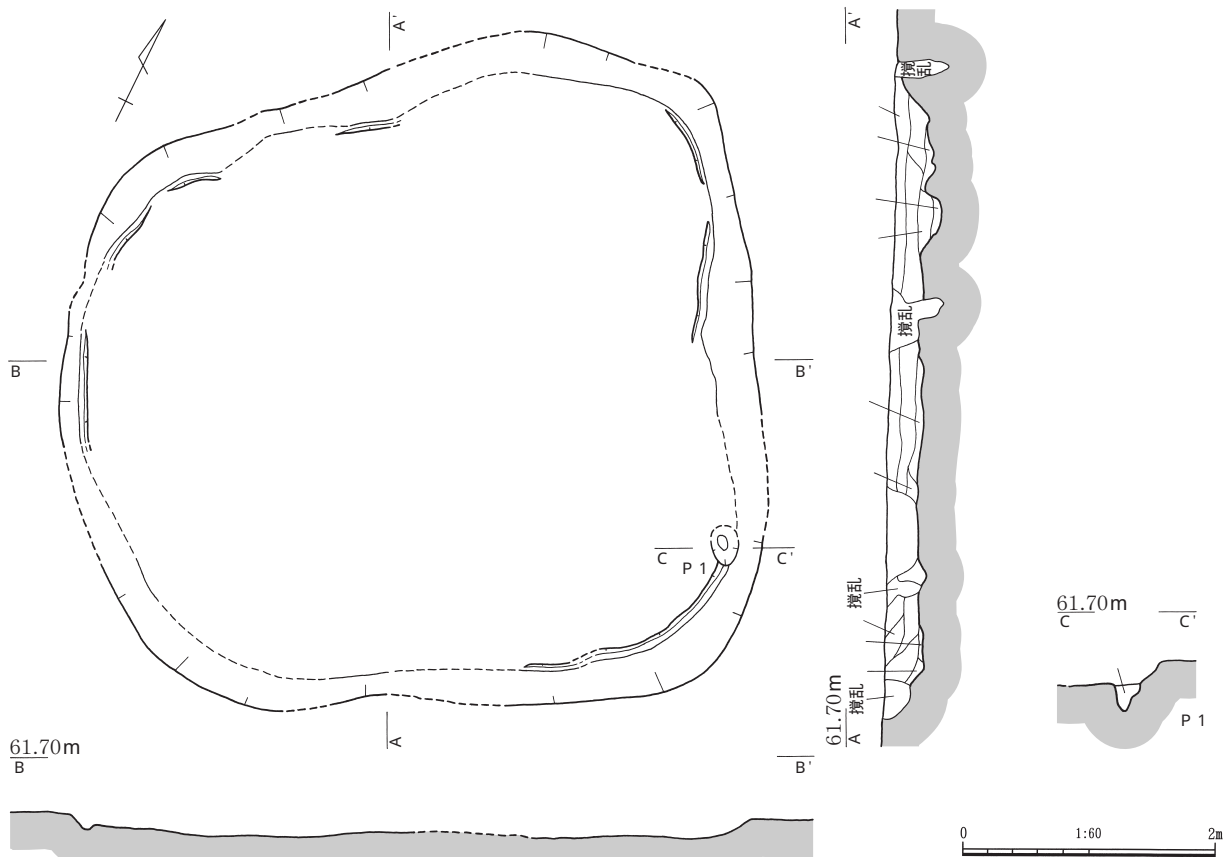
攪乱のため境界が明確ではない。溝1が土坑16に先行すると考えられる。北西-南東方向に主軸をとり、その走向は直線的で、等高線にほぼ直交する。幅は北西部0.8m、南東部1.0m、中央部0.6mである。底面の標高は、北西端57.7m、南東端57.8mであり、北西端がやや低い。検出面から底面までの

埋土は概ね褐色を呈し、地山土をブロック状に含むことから、人為的に埋められた可能性がある。①層は土坑と思われるが、大部分がトレンチ内であって記録できなかった。本遺構から遺物の出土はなく、時期は不明である。

(日置)

溝1 (図34 図版7-1)

調査地中央部西側L8グリッド、標高57.9~58.1mの緩斜面上に位置し、Ⅲ層下、Ⅴ層上面で検出した。北西端は土坑16に接するが、



褐色土 (Hue7.5YR 4 / 4) 明褐色土ブロック少量混  
 褐色土 (Hue7.5YR 4 / 6) 暗褐色土ブロック混  
 褐色土 (Hue7.5YR 4 / 6)  
 明褐色土 (Hue7.5YR 5 / 8) 褐色土ブロック多量混  
 褐色土 (Hue7.5YR 4 / 6) 層ブロック混  
 明褐色土 (Hue7.5YR 5 / 6) 暗褐色土ブロック混  
 褐色土 (Hue7.5YR 4 / 6) 明褐色土ブロック混

明褐色土 (Hue7.5YR 5 / 6) 褐色土ブロック、層ブロック少量混  
 褐色土 (Hue7.5YR 4 / 6) 明褐色土ブロック、層ブロックとも多量混  
 橙色土 (Hue7.5YR 6 / 8) 層ブロック少量混  
 褐色土 (Hue7.5YR 6 / 6) 層ブロック多量混  
 褐色土 (Hue7.5YR 5 / 8) 橙色土ブロック、層ブロック混  
 褐色土 (Hue7.5YR 4 / 6) 明褐色土ブロック少量混

図33 竪穴1

深さは20cmである。埋土は褐色土を主体とし、流水の痕跡は窺えない。遺物は出土していないため、遺構の時期は不明である。

(木山)

溝 2

(図16・35 図版 7-2・15-3)

調査地中央部東側K 6・7グリッド、標高58.1~58.2mの緩斜面上に位置する。Ⅲ層下、Ⅴ層上面で検出した。北東-南西方向に主軸をとり、平面形態は「y」字状を呈し、等高線にほぼ平行する。幅は北東端0.3m、北西端0.3m、中央部1.1m、南西端0.8mである。底面の標高は、北東端58.1m、北西端58.0m、中央部58.0m、南西端58.1mであり、検出面から底面までの深さは10~20cmである。埋土は橙色土を主体とし、溝3の埋土と類似している。流水の痕跡は窺えない。遺物は、安山岩を素材とする石匙(S37)が底面よりわずかに浮いた状態で出土しており、別項に図示した(図16)。土器片も出土しているが、残存状況が不良なため、遺構の時期は不明である。

(木山)

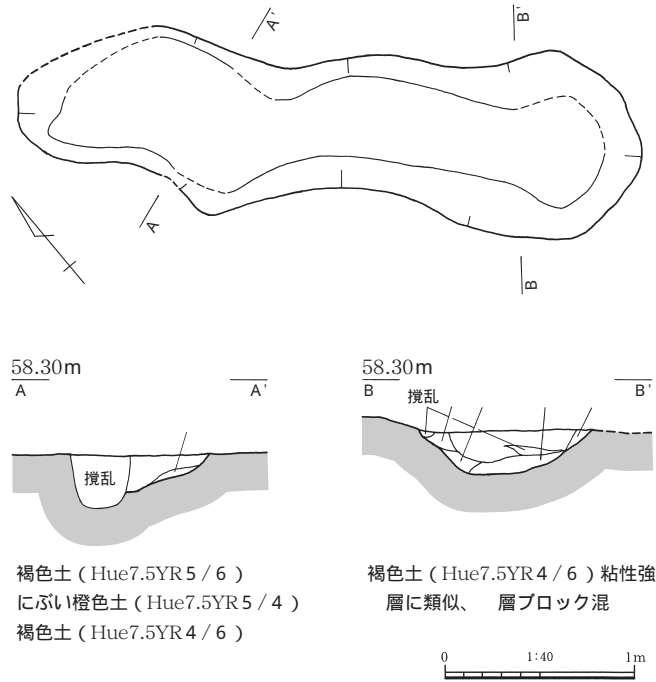


図34 溝 1

流水の痕跡は窺えない。遺物は、安山岩を素材とする石匙(S37)が底面よりわずかに浮いた状態で出土しており、別項に図示した(図16)。土器片も出土しているが、残存状況が不良なため、遺構の時期は不明である。

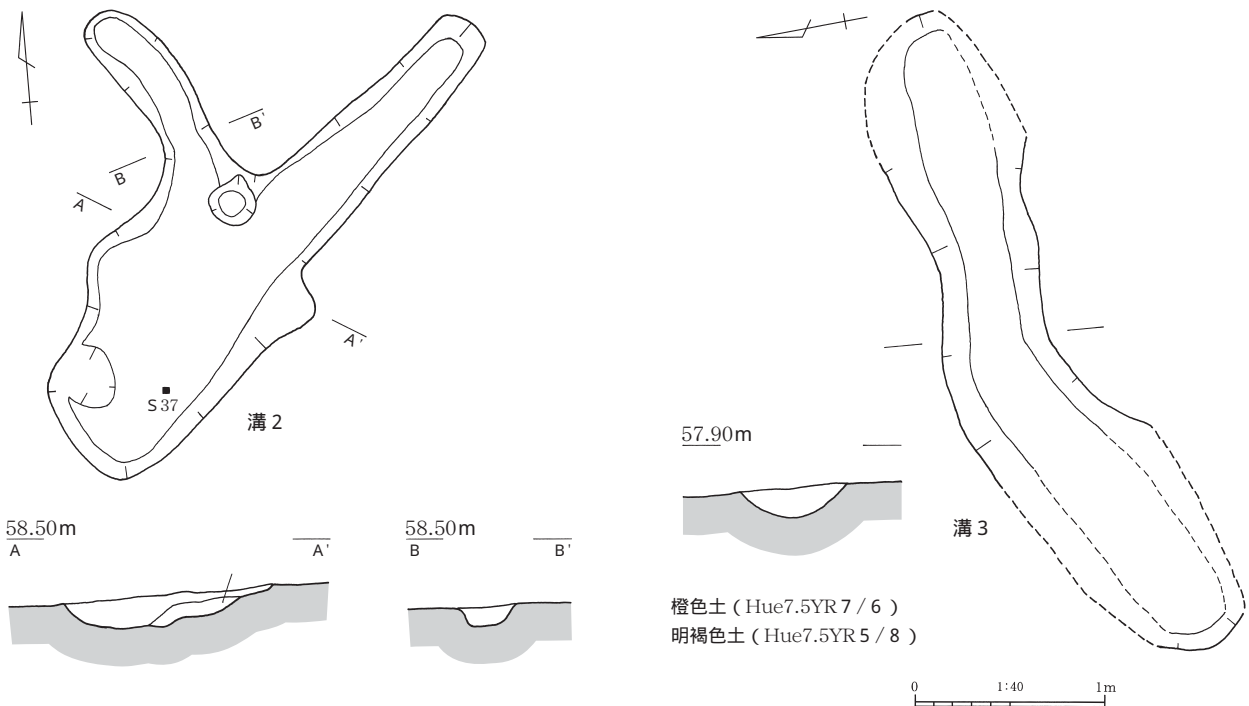


図35 溝 2・3

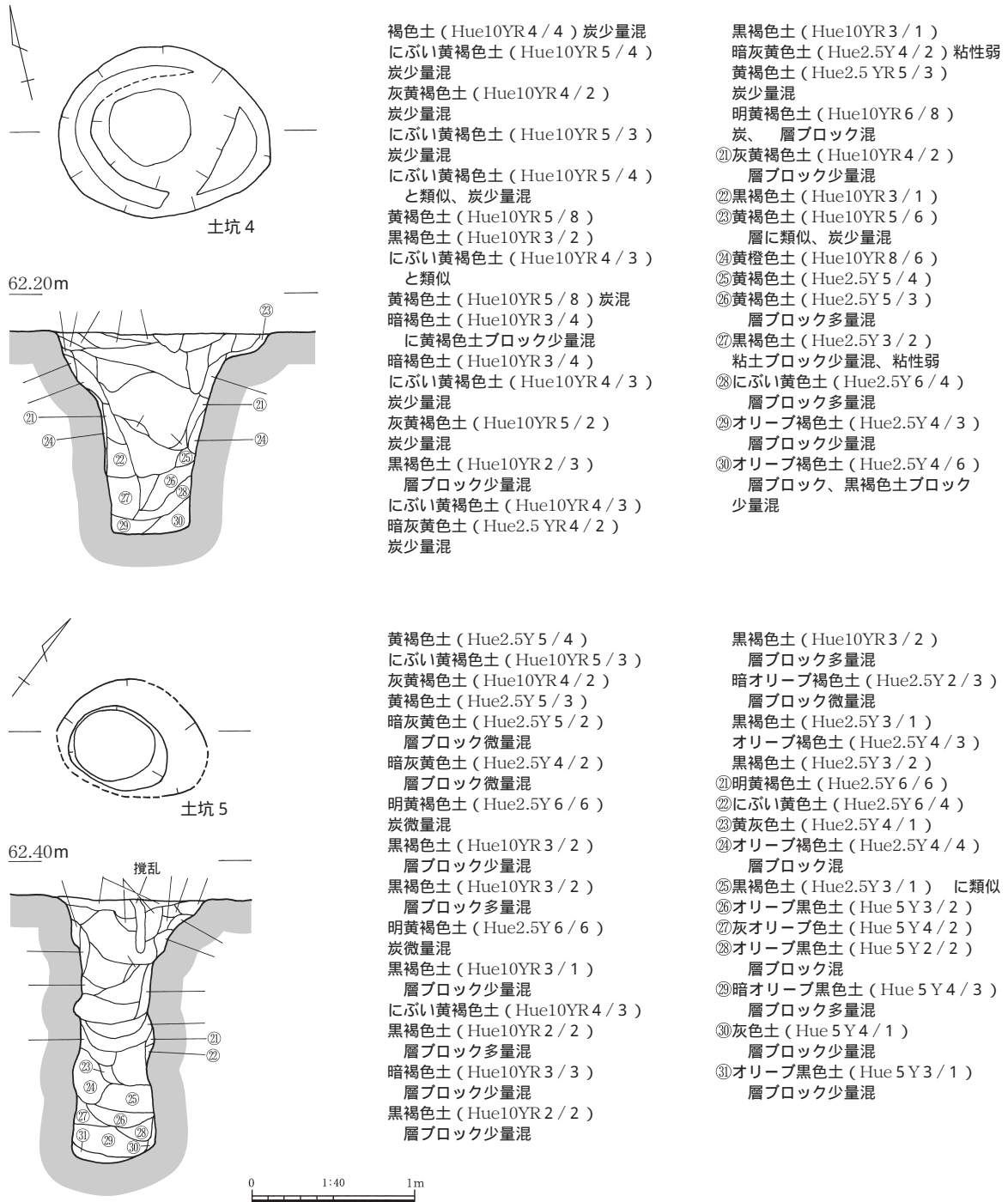


図36 土坑 4・5

溝 3 (図35 図版 7-3)

調査地中央部東側K7グリッド、標高57.6~57.7mの緩斜面上に位置する。Ⅲ層下、Ⅴ層上面で検出し、西側部分がトレンチで切られている。南東側6mに溝2が位置している。東-西方向に主軸をとり、その走向は直線的で、等高線にほぼ平行する。幅は0.5~0.8mである。底面の標高は、東端57.6m、西端57.5mであり、西側がわずかに低い。検出面から底面までの深さは20cmである。埋土は橙色土を主体とし、流水の痕跡は窺えない。遺物の出土はなく、遺構の時期は不明である。

(木山)

土坑 4

(図36 図版 8 - 4)

調査地南西側S 4 グリッド、標高62.0mの平坦面上に位置する。I層下、V層上面で検出した。平面形態は、長軸1.3m、短軸1.1mの不整な楕円形を呈する。ほぼ垂直に掘り込まれ、上方において開き気味に立ち上がる。底面は平坦で径0.5mのいびつな円形である。検出面から底面までの深さは120cmである。埋土上層は炭が少量混じる黄褐色系土、中層が黒褐色系土、下層が基盤層ブロックを包含する褐色系土である。出土遺物はなく、遺構の時期は不明であるが、形態から落とし穴の可能性はある。

(木山)

土坑 5

(図36 図版 8 - 5)

調査地南東側S 3 グリッド、標高62.1mの平坦面上に位置する。I層下、V層上面で検出した。平面形態は、長軸0.9m、短軸0.7mの不整な楕円形状を呈する。断面はほぼ垂直に立ち上がる。底面はややくぼんだ平面径0.5mの楕円形である。検出面から底面までの深さは160cmである。埋土は黒褐色土を主体とし、底面近くに基盤層ブロックが混じる黒色系土が堆積している。遺物は埋土上位より土器片が出土したが、残存状況が不良で、遺構の時期比定は難しい。底面にピットを持たないが、形態から落とし穴であろう。

(木山)

土坑 6 (図37 図版 8 - 6)

調査地南東側R 3 グリッド、標高61.9mの平坦面上に位置する。I層下、V層上面で検出した。南側上面部分はトレンチ内の検出である。平面形態は、長軸0.9m、短軸0.8mの不整な楕円形を呈すると思われる。断面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はややくぼんだ平面径0.5mのいびつな楕円形である。検出面から底面までの深さは140cmである。埋土は基盤層ブロックが混じる黄褐色系土を主体と

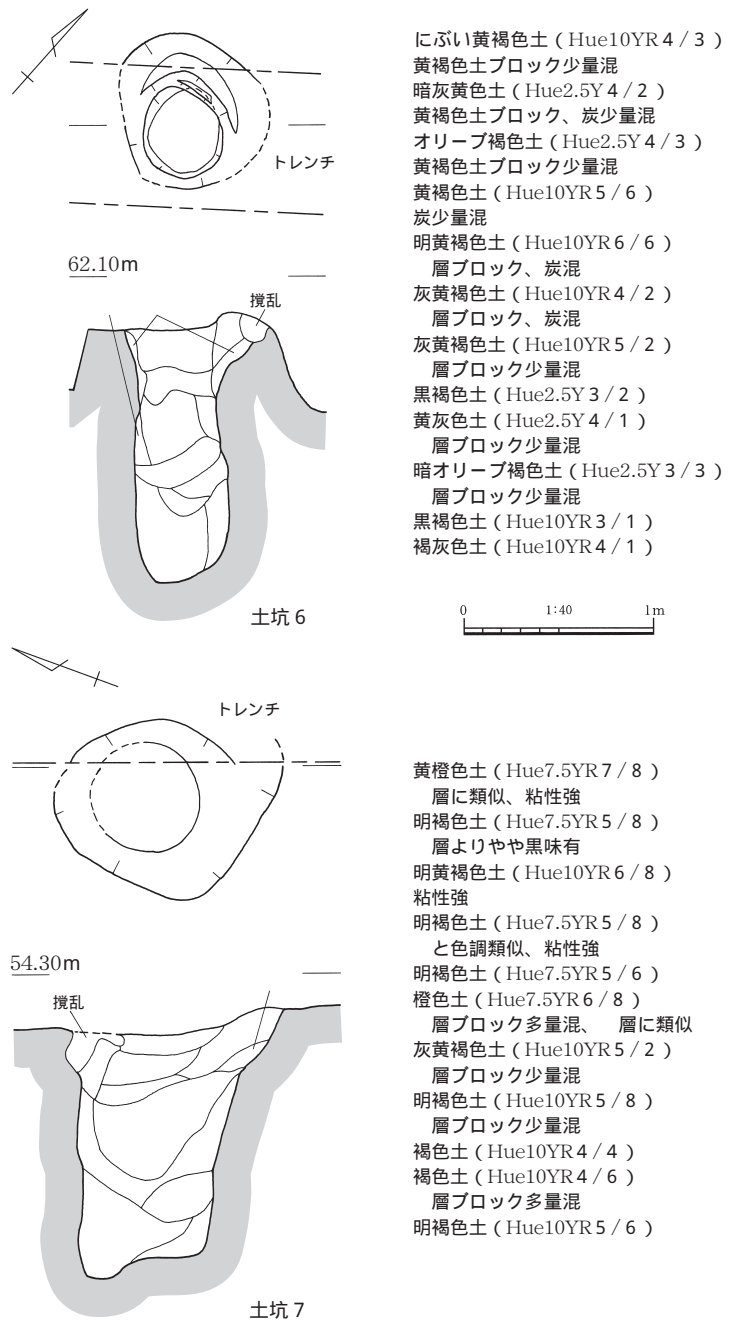


図37 土坑 6・7

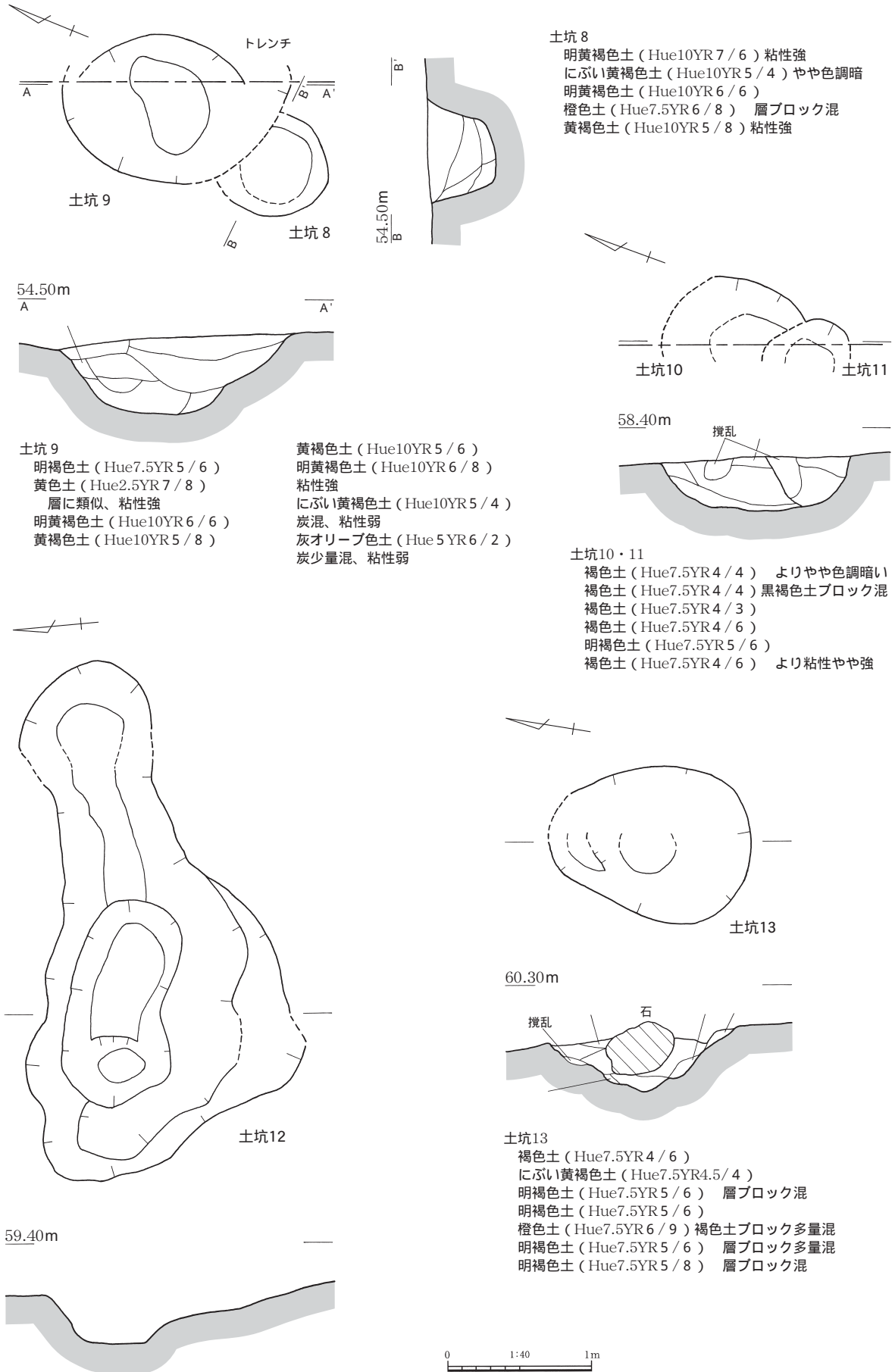


図38 土坑 8・9・10・11・12・13

し、底面近くに黒褐色土が堆積している。出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。底面にピットを持たないが、形態から落とし穴と考える。

(木山)

#### 土坑7 (図37 図版9-1)

調査地北西側F9グリッド、標高54.1mの緩斜面上に位置する。I層下、V層上面で検出した。北東側がトレンチで切られている。平面形態は、長軸1.2mの隅丸方形と思われる。断面はほぼ垂直に立ち上がり、上面においてやや開き気味となる。底面は北側がくぼむ径0.6mの不整な円形である。検出面から底面までの深さは140cmである。埋土は上層に明褐色系土、中層に基盤層ブロックが混じる黄褐色系土、下層は基盤層ブロックが混じる褐色系土が堆積している。出土遺物はなく、遺構の時期は不明であるが、形態から落とし穴の可能性はある。

(木山)

#### 土坑8・9 (図38 図版9-3・4)

調査地北西側F9グリッド、標高54.3mの緩斜面上に位置する。I層下、V層上面で検出した。土坑8・9は重複しているが、土層断面の観察より、土坑9が土坑8を掘り込んでおり、土坑9は土坑8に後出する。また、土坑9は北東側がトレンチと重複する。平面形態は土坑8が長軸0.7mの円形、土坑9が長軸1.6mの楕円形である。底面は土坑8が比較的平坦な円形、土坑9がレンズ状にくぼむ不整な楕円形である。検出面から底面までの深さは、土坑8が50cm、土坑9が60cmを測る。埋土は、土坑8・9ともに黄褐色系土を主体とし、土坑9の下層には炭が混じる。両遺構ともに出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

(木山)

#### 土坑10・11 (図38 図版9-2)

調査地中央部東側K7グリッド、標高58.2mの緩斜面上に位置する。Ⅲ層下、V層上面で検出し、西側部分がトレンチで切られている。土坑10・11は重複しているが、土坑11が土坑10を掘り込んでおり、土坑11は土坑10に後出する。平面形態は土坑10が長軸1.0mの円形、土坑11が長軸0.6mの円形を呈すると思われる。断面はいずれも緩やかに立ち上がり、底面は比較的平坦である。検出面から底面までの深さはともに40cmを測る。埋土は褐色系土を主体とし、土坑11には黒褐色土ブロックが混じる。遺物はいずれも土器片が出土したが、残存状況が不良なため、遺構の時期は不明である。

(木山)

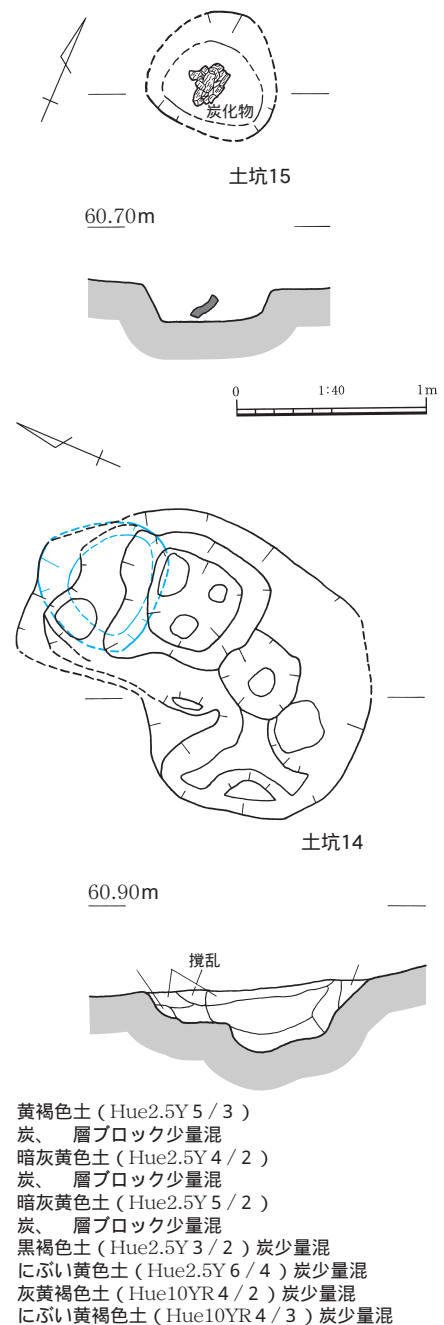


図39 土坑14・15